



写真3 小学校を案内する子どもたち

出す。ひょんなことから始まった授業を形に残そうと思い、カメラを弄っていると、子どもたちが思い思いのポーズを取り始める。可愛らしい仕草をする子、真顔でレンズを見つめる子、はにかんだ笑顔で棒立ちする子。ポーズだけでもそれぞれの個性が出る。

そろそろ夕飯を食べるからと小さな先生たちに別れを告げた。彼らも夕飯の時間だ。親たちが帰りを待っているだろう。少し寂しい気もするが、最後まで笑顔で。

「バイバイ！元気だね！」

さあ、今日もカメラを相棒に、新しい出会いに期待しながら道を歩きつづけていこう。

「Sabaidii, thaihub dai bo ? (こんにちは、撮影してもいいですか?)」

ネパール「人民戦争」の終結に関する語り

—K.B. ロカヤ氏の証言より—

荒 木 彩 陽 *

2023 年夏、私はネパールの首都・カトマンズを中心に、ヒンドゥー・ナショナリストやその他宗教団体に所属している活動家たちに対するインタビュー調査を行っていた。調査を進めていく中で、クリスチャンの活動

家として紹介してもらい出会ったのが、K.B. ロカヤ氏である。

K.B. ロカヤ氏とは？

医療設備もない田舎の、ヒンドゥー教徒の

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

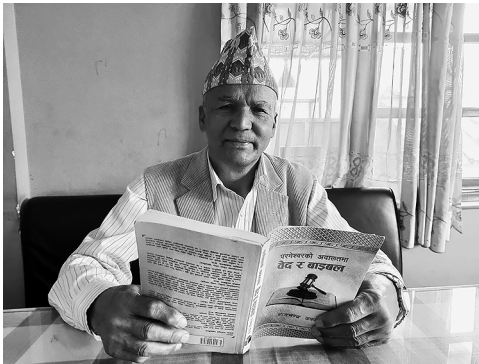


写真1 K.B. ロカヤ氏

家庭に生まれ育ち、1972年にコルカタの大学に進学した際、キリスト教に改宗した。ネパールに帰国後は、教会の設立や大学の講師などに従事。その後、「人民戦争」を終結させることを目的に、2003年10月から2007年までネパール共産党毛沢東主義派（マオイスト）のメンバーとなった。

ロカヤ氏行きつけのカフェで、2日間計8時間におよんだインタビューでは、他にも興味深い話を聞くことができた。しかし、以下では「人民戦争」終結のための和平交渉のテーブルに着くまでのロカヤ氏の貢献について焦点を絞り、記述する。

「人民戦争」前後の略歴と停戦協定までの流れ

ネパールは1990年に第一次民主化を迎えるまで、約200年にわたって国王を頂点とする封建体制がとられてきた。しかし、民衆に政権が渡されても政党政治は不安定であり、マオイストが台頭した後、1996年から「人民戦争」へと突入していく。

2000年代初頭には、ネパールにとって大

きな2つの転換点があった。ひとつは2001年6月1日に発生したナラヤンヒティ王宮虐殺事件である。これにより、第10代ネパール国王であったビレンドラ国王夫妻を含む10人の王族が亡くなり、国王の弟であるギャネンドラが新しい国王となった。そして、そのギャネンドラ国王が2002年10月4日に無血クーデターを行ない、既存の政府を罷免した後に国王が任命した首相率いる新政府が発足した。これにより、それまで警察隊のみがマオイストに対抗していたが、そこにネパール王国軍が加わるようになり、争いは激しさを増した。

また、2001年にアメリカ合衆国で発生した同時多発テロも「人民戦争」に大きな影響を与えた。これを受け、ブッシュ大統領（当時）は同年9月23日に大統領令13224を発布し、テロリストの活動を食い止めるための国際的な活動を先導することを発表すると同時に、世界中のテロリスト集団のリスト化を開始した[U.S. Department of State 2024]。また、マオイストも2003年5月に人民義勇軍を各地で結成することを中央委員会議で決定し、非武装メンバーや一般市民などに対する武装訓練を始めた。このような潮流により、2003年10月31日にはマオイストはアメリカ合衆国からテロリスト集団であると認定された。以降、アメリカやイギリスなどの欧米諸国や隣国インドなどは政府側への支援を表明し、政府側が強硬姿勢に転じることとなった。これらの要因が重なったことから、「人民戦争」は激化の一途をたどった。

2006年4月には王政を打倒するという共

通の目的から、マオイストも7つの議会政党と協力すると宣言し、19日間におよぼゼネストが行なわれた。結果、同月24日には国王が主権を国民に返還し、国会を復活させることを宣言した。これは第二次民主化運動とも“四月革命”とも呼ばれている。同年5月2日に7政党による連立政権が発足し、26日にはマオイストと7政党による連立政権との間で和平に向けた交渉が開始された[小倉2015]。そして同年11月21日、マオイストと連立政権が包括的和平協定に調印した。

和平交渉に至る過程は複雑で、そこには数えきれないほど多くの要因が関わっているであろう。しかしその中でも、本稿で紹介するK.B.ロカヤ氏による語りは、和平交渉を開始させるひとつの重要な要因を指し示すものだと考える。

和平交渉を開始させるための、ロカヤ氏の貢献

「人民戦争」が激化の一途をたどっていた2003年、ロカヤ氏は国際的に大きな力をもつアメリカ合衆国とヨーロッパ連合(EU)、そして英国の3つの国家および国際機関とマオイストが対話を行なうことが平和的な終戦につながると考えていた。しかし、これらの国家や国際機関はアメリカが主導していた「テロとの戦い」を支持しており、「アメリカ合衆国は(テロとの戦いを主張していたことから)ネパール政府に対してマオイストと対話することを許可しなかった」というほど強い規制があったことから、平和的な終戦の

ための対話はほぼ不可能のように思われていた。

ここで諦めることなく、欧米諸国のキリスト教徒仲間の人脈を使い、さまざまな行動を起こしたのがロカヤ氏であった。その第一歩として、6回にわたるノルウェー訪問と、ドイツ並びにベルギー、イギリス訪問にてネパールの現状について声を挙げた。ノルウェーに焦点を当てて訪問した理由としては、当該国が平和構築や和解について非常に積極的に活動しており、これについての知識を豊富にもっていたこと、そしてネパールにとって最も大きなドナー国のひとつであったことを挙げている。自らの主張を多くの人々に伝えるために、ノルウェー議会や政府機関、オスロ大学、ノーベル平和賞の事務局、そして報道機関などを訪問した。またドイツに関しては、当時マオイストのメンバーであったChandra Prakash Gajurel氏が同国に招聘されたことからこれに同伴し、8都市にて「人民戦争」に関するドキュメンタリー映画の上映会を実施した。これ以外にも、ドイツ議会や政府機関、教会や報道機関などに足を運んだ。ベルギーでは欧州連合の本部を訪れ、イギリスではBBCの「人民戦争」についての番組に出演した。

いずれの国でもロカヤ氏の主張は一貫しており、①マオイストはテロリストではなく、ネパール政府はマオイストと対話を行なうべきであるということ。そして②それぞれの国の援助により、ネパール政府に対話の機会をもつように圧力をかける、あるいはネパール政府への経済的援助を止めてほしいという2

点であった。上記のとおり、これらの主張は国家にだけ向けて行なわれたわけではなく、民衆に対しても行なわれた。ノルウェーにおいては、「ノルウェー国民の税金がネパール人を殺すために使われている」と人々に訴えたことにより、人々の心を揺さぶった。その結果、在ネパール・ノルウェー大使がメディアに対して「もしネパール政府がマオイストとの対話を開始しないのであれば、ノルウェー政府からの援助については検討する必要がある」という意見を表明する事態にまで発展した。また、イギリスは情報機関の調査員をネパールに送り込み、マオイストの副代表である Krishna Bahadur Mahara 氏との対談を実現させた。これらの活動により、国際連合とイギリスは（ネパールにおける「人民戦争」については）必ずしもアメリカの掲げる「テロとの戦い」に従うのではなく、マオイストとネパール政府の対話の必要性について理解を示し、これについて反対することはなかった。

次に、ロカヤ氏は「人民戦争」が終結するためには、ネパール政府の後ろ盾となっているアメリカ合衆国政府に“テロリスト”であるマオイストとの対話を認めるように政策転換させることが必要であると考えていた。しかし、アメリカ合衆国の政策を変えさせることが非常に困難であることは、ロカヤ氏も理解していた。そこで、クリスチャン・コミュニティを利用してアメリカ合衆国の民衆に訴えかけ、市民の力によってこれを成し遂げようとした。実際にアメリカ合衆国を訪れ、「国家間や国際機関が仲介する形ではな

く、個人のつながりと協力によって成し遂げる新たな形の紛争解決を求めている」というキャッチフレーズを用いて人々に訴えかけた。人々は信仰の自由を獲得するというマオイストの要求に共感し、戦争を止めるために市民の力が必要だという点に理解を示した。しかし、国家政策を変えるほどの影響力を与えることはできなかった。

途方に暮れていたところ、ここでクリスチャン・コミュニティの奇跡が起こる。ロカヤ氏が協力を求めたアメリカのクリスチャン・コミュニティの中に、ネパールで30年程宣教活動をしていた宣教師がいたのだ。彼が実際にネパールを訪れ、他のアメリカ人宣教師と話をしたことにより、在ネパールアメリカ大使館の高官の関係者である宣教師と知り合うことができた。そして、ロカヤ氏はネパールに在住するアメリカ人宣教師の家で、非公式に大使館の高官と面会することに成功した。何度か話し合いを重ねていくうちに、アメリカ大使館が正式にマオイストとネパール政府が話し合いを行なうことを認めたのである。ロカヤ氏による一連の働きかけが、和平交渉の開始を後押ししたという。

「残念ながら、これらの活動に関する正確な日付は覚えていないが、いずれも2002年から2006年の和平交渉開始までの間に行なわれたことである」とロカヤ氏は述べる。「いっそのこと、日記でもつけていれば良かったんだけど」と後悔の念を示していた。

前述のとおり、これだけが「人民戦争」を終結に導いたと考えることは難しいだろう。しかし、市民レベルでもこのような動きがと

られていたという点について、完全に無視することもできない。「この話の一部はネパールメディア向けに話したことがあるが、ここまで詳細に時系列順に誰かに話したことはなかった」とロカヤ氏は言う。すべてが真実であるという裏付けはとれないが、非常に貴重な証言であることに間違いはない。

引用文献

- 小倉清子. 2015. 「武装闘争から議会政治へ」南真木人・石井溥編著『現代ネパールの政治と社会—民主化とマオイストの影響の拡大』明石書店, 55-90.
- U.S. Department of State. 2024. "Executive Order 13224." (<https://www.state.gov/executive-order-13224/>) (最終閲覧日 2024年5月30日)

にぎやかなお通夜

—残された者への寄り添い方—

佐々木 恩 愛*

ラオスで生活をしていると、葬儀に参加することがよくある。ホームステイ先のお父さんは、仕事柄顔の広い人だったこともあり、しばしば葬式に招かれていた。ラオスでは、人が亡くなると、遺体を自宅に3日間安置し、その後寺院や村の郊外で火葬し、その後、親族が遺骨を骨壺に収めて、墓地や寺院境内に納める [増原 2003: 259]。また、上座部仏教のしきたりに則り、故人の男性家族はその期間だけ出家し、女性家族や小さな子どもは白い服を着る。これらは、上座部仏教を信仰する低地ラオ¹⁾の人々の慣行である。私が参加したのは、遺体を自宅に3日間安

置している家への訪問（通夜）と火葬への参列であるが、それらを通して個人的な出来事ともつながる印象的な経験をした。

お通夜の雰囲気

ある日、お父さんの職場で働く方の家族が亡くなり、私はその方のお通夜に行った。服装はシン（ラオスの伝統的な巻きスカート）であればなんでも良いと言うので、紺色のシンに真っ白なワイシャツを着て行った。故人の家に着き、ご遺族に挨拶すると、棺が置いてある部屋に案内された。棺は綺麗に飾られ、花やお金が供えられていた。ご遺族とお

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

1) ラオスには数多くの民族が暮らしているが、1950年以降、全ての民族を居住地の高低によって、低地ラオ、山腹ラオ、高地ラオの3グループに分けられた。現在この分類は公式には使用されていないが、一般的に広く使われる [安井 2010: 19-22]。低地ラオの人々は人口の半分以上を占めるタイ系民族である。